

知的障害教育における「考える力」を大切にした教育実践(1)

—小学部で考える児童の「考える力」とは—

牧田英美里・石川由美子・福田 奏子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日

知的障害教育における「考える力」を大切にされた教育実践(1)[†] —小学部で考える児童の「考える力」とは—

牧田英美里*・石川由美子**・福田 奏子**
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校*
宇都宮大学共同教育学部**

本研究では、知的障害特別支援学校における「考える力」について、小学部での授業実践から見てきた児童の「考える姿」を整理していくことを通じて検討した。小学部の児童が授業において見せるエピソードを複数の教師で見取り、学部内研究会で意見交換しながら、児童の多様な「考える姿」を確認した。その結果、児童が興味関心をもったり「やってみたい」と思ったときに考えることが始まるということや、一人で集中して取り組んだり、繰り返し同じ活動を行ったり、他者と関わったりしながら考えを変化させながら表現していることが分かった。このことにより、小学部では、児童の「考える力」とは、「情動が動いた事象に対して、自分なりに工夫したり表現したりして対応する力」であると定義した。

キーワード：考える力、考える姿、知的障害特別支援学校小学部

I はじめに

本校小学部の児童は、知的障害の他に、自閉スペクトラム症やダウン症候群、言語発達遅滞等を併せ有する児童が在籍している。これまでの学校生活における児童の「考える姿」の様子は、教師や友達など身近な人とやりとりを楽しむことができる児童や自分のやりたいことを遊びや活動の中で自分なりに表現しようとするような児童もいれば、言葉で自分の思いを上手く伝えることが難しい児童や、教師が

提示した選択肢の中から選んで活動するような児童も見られ、何かを考えるという行為やその速度、考え方を含めた「考える姿」には様々な違いが見られた。

このように、児童によって「考える姿」とは多様であり、日常生活や学校生活において頻繁に見られるものである。さらにそれらの姿は、「考える力」によって発揮されるものであり、「考える力」と「考える姿」は相互に関連しているものとする。

今後、児童に求められる力の一つに、自分の頭で「考える力」が挙げられる(細谷, 2017)。教師は、児童の「考える力」を学校生活の中でどう育ていけるのか、また、学部の特徴や児童の特性に応じた「考える力」とは何か、さらには効果的な日々の授業実践とは何かについて検討していくことが重要であろう。そのための初年度として、児童の「考える姿」から、小学部で考える「考える力」とは何かを整理し、教師間で共通理解をもって授業実践を行っていくことが必要であるとする。

II 目的

知的障害特別支援学校小学部における「考える力」とは何かについて、授業の中における児童一人一人

[†] Emiri MAKITA* and Yumiko ISHIKAWA** and Kanako FUKUDA**: Educational Practices that Value the Ability to Think in Education for Intellectual Disabilities (1): What is the “thinking ability” of children in elementary school

Keywords: ability to think, How children “think”, Intellectually Disabled Special Needs School Elementary School

* Special Needs Education School Attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: ym_ishikawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

(連絡先: k-fukuda@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

の「考える姿」について整理していくことを通して検討する。

Ⅲ 方法

1 小学部における児童の「考える力」の仮説

研究協力者の指導・助言を基に、教師間で意見交換し、学部内で検討を重ね、児童の「考える力」について仮説を立てた。

2 「考える力」に焦点を当てた授業づくりと授業実践

小学部で立てた仮説を基に、児童の「考える力」に焦点を当てた授業の学習指導案作成と授業づくりを行った。授業実践では、一人一授業の取り組みとして、6月～10月の間に研究授業を行った。

3 児童の「考える姿」のエピソード記述と学部内研究会の実施

授業実践の中で見られた児童の「考える姿」についてエピソードを記述し、教師間で意見交換を行った。意見交換は、Google社が提供するオンラインホワイトボードサービスであるGoogle Jamboard（以下、ジャムボード）を使用して行った。研究協力者からの指導・助言を基に、授業の中のどの場面で児童の「考える姿」が見られたかについての記述と、記入者から詳細についての説明を求めた。また、出された意見を同じ場面や同じ姿ごとに分類し、キーワードを挙げながらカテゴライズして整理した。なお、整理していく過程は、全てジャムボードを使用し、パソコンの画面上で行った。

4 小学部における児童の「考える力」の再検討

学部内研究会で出された「考える姿」やキーワードを基に、小学部で考える児童の「考える力」について再検討を行った。

Ⅳ 結果と考察

1 小学部における児童の「考える力」の仮説と再検討

表1には、小学部の研究会等において検討した、学部の「考える力」について示した。6月は、研究協力者の指導・助言を基に、学部の教師間で意見交換し、学部研究会等で検討を重ねることで仮説を立てた。そして、その後の研究授業や公開研究会の実践後に行った研究会を通して、「考える力」について再検討した。

表1 小学部で考える児童の「考える力」の仮説と定義

検討した時期	「考える力」とは
6月 (研究協力者の指導・助言後)	・児童自身の「～したい」という欲求が生まれたり情動が動いたりしたときに現れる、児童が興味関心や得意なことを生かして活動したり、教師や友達とやりとりしたりする中で発揮する力。
9月 (授業実践と部内研究会後)	・他者との関わりの中で発展していくものであり、経験したことややりたいこと、自分の思いを自分なりに表現する力。
12月 (授業実践と公開研究会実施後)	・情動が動いた事象に対して、自分なりに工夫したり表現したりして対応する力。

小学部では、児童がやってみたい、どうしたらできるだろうと興味をもって自分で考えた結果、行動が現れる、興味をもったり情動が動いたりしたときに注意が向き、自然と考えることにつながっていくという意見を基に、小学部の教師間で考える「考える力」とは何かの検討を行った。その結果、児童が興味をもったり「～したい」と欲求が生まれたりすることで、児童の自発的な行動が生まれるであろうと考えた。また、「考える力」は、児童一人の活動の中ではなく、教師や友達など、身近な人と共に活動したりやりとりしたりする中で発揮されるものであると仮説を立てた。

その仮説を基に、6回の授業実践を行った。学部内研究会では、授業内の児童の様子から、「考える力」とは、「経験したことを生かす力」「自分なりに表現する力」ではないかという意見が多く挙げられた。また、その力は教師や友達といった身近な人とのやりとりしたり共に活動したりする中で発展するであろうことを再確認することができた。

公開研究会でのワークショップを基に、12月に「考える力」の再検討を行った際には、興味をもったときや環境と自分の思いの間で折り合いを付けようとしたときなどの情動が動いたときに「考える」ことが始まるだろうということが挙げられた。また、他者との関わりの中で違いに気付いたり自分の活動を変化させていったりする一方で、一人で十分に活動する経験や満足感から、工夫が生まれたり、他者に目を向けるきっかけになったりすることもあるのではないかという意見が挙がった。そこで、他者との関わりの中で発展していくものと限定せず、活動の中で一人で集中して取り組んだり、繰り返し活動したりしている場面や他者と共に活動する場面などあらゆる場面で生じるものであろうと考えた。また、考える過程において、他者に伝えるために表現して

いるだけではなく、もっと楽しくしたい、こうした
いと活動を工夫していく中にも考える姿が見られる
という意見から、小学部で考える「考える力」を「情
動が動いた事象に対して、自分なりに工夫したり表
現したりして対応する力」と定義した。

表2 小学部の一人一授業実践における授業の概要

教科・指導の形態名	単元・題材名
生活単元学習	1くみランドで自由に遊ぼう
生活単元学習	1くみランドで自由に遊ぼう
生活単元学習	楽しく遊ぼう
生活単元学習	秋を楽しもう
生活単元学習	校外学習に行こう
生活単元学習	風で遊んでみよう

2 「考える力」に焦点を当てた授業づくりと授業実践

令和4年度は、一人一授業として、公開研究会担
当者は10月に研究授業を行い、その他の教師は7
月～8月の期間に研究授業を行った。表2には、小
学部で行った生活単元学習六授業の単元名を示し
た。授業づくりでは、仮説として立てた「考える力」
に焦点を当てて、児童の「考える姿」が多く見ら
れるような授業内容の検討を行った。また、場の設定
や教材・教具の工夫、授業の目標設定と指導上の留
意点等の検討を行いながら、学習指導案を立案して
実践を行った。

3 児童の「考える姿」のエピソード記述と学部内 研究会の実施

それぞれの授業中に見られた児童の「考える姿」
について部内協議を行った。図1～5は、部内研究
会において教師から出された、児童の「考える姿」
とキーワードについてジャムボードに記入されたも
のを示した。

「1くみランドで自由に遊ぼう」では、教師や友達
が遊ぶ姿に注目したり、まねたり、やりとりを通し
て遊びを展開したりしながら、三つのコーナーの中
で自分のやりたいことを考えている姿が見られた。

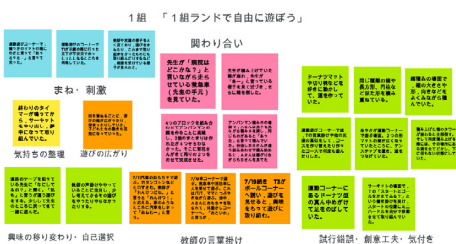


図1 「1くみランドで自由に遊ぼう」における「考える姿」

「楽しく遊ぼう」では、興味のある素材での遊びを繰
り返し行ったことで、遊びの経験を生かしたり、友達の様
子を自分の遊びに生かしたりして工夫する姿が見られた。

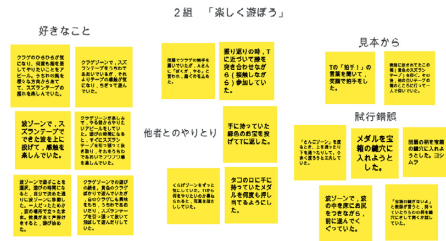


図2 「楽しく遊ぼう」における「考える姿」

「秋を楽しもう」では、前時までの活動や過去の生活
経験、絵本の内容から秋に関することを想起して発言し
たり、活動に取り組んだりする様子や、教師や友達と収
集した物を見せ合ったり比べたりする姿が見られた。

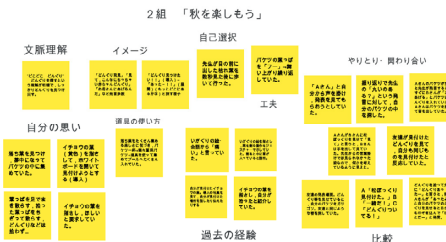


図3 「秋を楽しもう」における「考える姿」

「校外学習に行こう」では、校外学習での経験を
生かしてバスや電車でのごっこ遊びを組み立てた
り、校外学習での出来事を振り返って話をしたりし
ながら教師や友達と遊んだりする姿が見られた。こ
の授業では、教師と児童がやりとりをしながら遊び
を展開させていったり、教師の言葉に反応して遊び
を変化させていったりする様子が多く見られた。



図4 「校外学習に行こう」における「考える姿」

「風で遊んでみよう」では、風で動くおもちゃを
動かすために、教師や友達とのやりとりから風の起
こし方を工夫したり、様々な道具の中から自分の使

いやすい道具を選んで使ったりする姿が見られた。

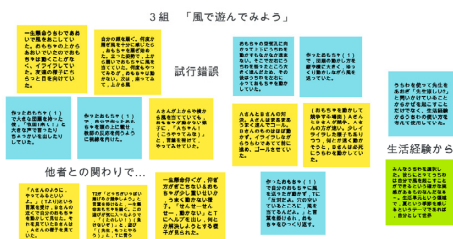


図5 「風で遊んでみよう」における「考える姿」

六つの授業実践の結果から、単元や日常生活の中で経験したことを自分の遊びに取り入れたり、繰り返し遊び込むことで遊びを工夫したりして変えていったりする様子や、教師や友達と共に活動したりやりとりしたりする中で遊びを変化させていく様子から、児童の考える姿を多く見取ることができた。

授業づくりを行う際には、6月までの仮説の検討を経て、「自由度の高い文脈で」「得意なことややりたいこと・経験を生かすことができる環境づくり」を指導上の留意点に挙げた。その結果、活動の中から自分の好きなことを見つけて活動したり、遊び込む中で新しい遊びを工夫したり次の遊びに興味をもったりする姿や、生活経験や学習経験を結び付けて活動する姿が見られた。児童は、「やってみたい」「こうしたい」と自分の内面で考えたことを、遊びや活動を通して動きや言葉で表現しているものと考えられる。このことから、小学部児童の「考える力」とは、「経験したことややりたいこと、自分の思いを自分なりに表現する力」と定義し、11月の公開研究会で研究授業を行った。研究授業の中でも、児童が「やってみたい」と感じたり疑問に感じたりしたことをきっかけにして活動する姿が見られた。このことから、児童の情動が動く環境づくりが「考える力」には必要であることが分かった。授業場面では、前時までの活動や児童の「やってみたい」をつなげることで、児童が学習経験を生かしたり、新たな「やってみたい」を生み出したりすることができ、情動が動く場面を作り出すことができると考える。

さらに、「教師や友達と共に活動できる場の設定」をしたことで、授業実践の中では、児童が教師や友達とやりとりしながら遊ぶ様子や、教師や友達の活動の様子を見て、友達の活動に興味をもったり自分の活動に取り入れたりする姿が見られた。児童は、教師や友達といった身近な人とのやりとりや関わり

の中で自分の活動を変化させ、考えを広げたり深めたりしていき、相手に伝えるために表現したりしているということが分かった。このことから、「考える力」は児童一人での活動ではなく、「他者との関わりの中で発展していくもの」であると考えられる。加えて、児童は同じ活動を何度も繰り返し行う中でより良いものを求めて遊びを進化させていくなど、一人で十分に活動し、満足することで、新しいものを作り出すこともできるということが分かった。

V まとめと今後の課題

小学部では、授業実践を通じて、授業中に見られた「考える姿」について検討を重ね、その具体的な「考える姿」から、学部で考える児童の「考える力」について、表1のように整理した。

先述したように、授業実践と学部内研究会を通して、児童が「やってみたい」と感じたり、興味関心をもったりしたときに情動が動き、考えることが始まるということが分かった。考える過程では、児童が一人で十分に集中して取り組んだり繰り返し何度も同じ活動したりすることが分かった。また、児童が教師や友達など身近な人と共に活動することでも、過去の経験や他者の様子から工夫や新たなものが生まれたりし、それを言葉や行動で表現していくということも分かった。

今後の課題としては、児童の発達段階や興味関心の実態に即した題材や学習内容の設定、児童が安心して自分のやってみたいことや表現したいことを表すことができる関係づくりや環境づくり、共に活動する教師や友達が見える場の設定や教師の適切な言葉掛けについて、検討を続けていくことが重要であると考えられる。

付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校における令和四年度校内研究の小学部研究（メンバー：手塚則子，根本美咲，舟橋周史，牧田英美里，増淵有美，矢野望，吉村俊介，石川由美子^{*}，福田奏子^{*}）として共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。（氏名の並び順は五十音順，^{*}は研究協力者）

文献

細谷功 (2017) 『考える練習帳』，ダイヤモンド社。

2023年3月31日 受理

Educational Practices that Value the Ability to Think
in Education for Intellectual Disabilities (1) :
What is the “thinking ability” of children
in elementary school

Emiri MAKITA and Yumiko ISHIKAWA and Kanako FUKUDA